

5月下旬、文京区内の公園で、小学校3年生の子どもが見つめて捕獲した幼いへびです。最初は「アオダイショウの子どもではないか」と思いましたが、細く小さい体つき、黒っぽい体色、頭部の形などの特徴から、ヒバカリの幼蛇と考えられました。子どもの小さな手のひらにすっぽり収まるほどの大きさで、都市の公園にもこのような小動物がひっそり暮らしていることに驚かされます。

ヒバカリは、本州から九州にかけて分布する小型のへびで、水辺や湿った草地を好みます。カエルやオタマジャクシ、小魚などを食べる、おとなしい種類です。名前の「ヒバカリ」は、「咬まれるとその日ばかりで死ぬ」という古い言い伝えに由来するとされますが、実際には人に重大な危険を与える毒蛇ではありません。もちろん、野生動物なのでむやみに触らないことは大切ですが、過度に恐れる必要はないへびです。ただし、東京都では絶滅危惧II類に指定されている、ややへビーなへびです。

アオダイショウの幼蛇は、褐色系の地色に斑紋が目立つことが多く、今回の個体とはかなり印象が異なります。一方、この個体は、全身がほぼ黒色で、非常に細長く、首と頭の境界もなだらかで、ヒバカリらしい特徴をよく示していました。都市化の進んだ文京区の公園にも、こうした小さな捕食者が生きていることは、身近な自然環境がまだ残されている証でもあります。子どもたちが「こわいへび」としてだけでなく、都市の生態系を支える生き物の一員として観察できると、理科の学びもさらに深まるように感じました。

(2026年5月下旬／文京区内)

